

樋の落葉吹き散らすもよ日短き

明治學院俳句會にて、四句、句の傾向多少古きは啓蒙的の意味があつたからである。

檜葉ひとゆれ濃き影見せぬ日短き

顔を追ふ陽ざしもうけれ水涸るゝ

來し方の草鳴り聞くや水涸るゝ

松とりて入る宵やみの後あとに濃き

門に入りて山を見晴す枯芝に

親子揃うた草の芽に若き陽もが

—昭和五年—

落日見ゆ群れよりはなれ行くかな

わが前の金盞花互にながめらるゝ

春の人ら陽にあきて雪を散らし

前途暗し

疲れて見る柳ともなし強き芽生え

内田南艸令妹追悼二句

朝霽れて檜葉の霰間遠に落ち

夜にひらく花活けて佛をまつる

小路より出て師走の群がりに交る

粉雪散る寢ざめたほうけた顔

土を起こす草の芽ぬれくとあり

みどりの葉裏を仰ぎ徑を選びぬ

今日しも仰ぐ柳なれ散葉もなく

大木に寄るみどりの草ちぎりては捨てつ

地は掃かれて人を見ぬ柳の葉づや

朝の柳吹かずもあれ人改まれり

相州二ノ宮町梅田氏別邸にて

日暮れに着き炭を探しに出る

地の印象二句

老いし人若き人らに地のくるさ

人移りて地のくろくと窓に見ゆ

羽目に苔むして今年の桐の衰へ

白秋山居追懐 三句

炊事場は土間となつた鶏頭赤く

秋草を窓にさし朝のパンを食ふ

竹林に春がしめつて草の紫

中島氏の結婚を祝す

菊活けて我等が願ふ日來れり

病床吟 二十句

草も木も冬日を送らうとしない

蠅が來る湯上りの病む顔に

額に集まる冬の入日のまゝに

蜻蛉捕へて放す陽のあまねく

寐て仰ぐ冬日につかれが来る

病む顔に冬の日やすらかに落ち

子のいびき静まり灯をともしに起く

冬の夜のわが聲をいとふ妻かな

夕のわれを見て子らは隅にひそまり

寐て見る南天のすゝを洗はせ

夜風強きまゝ菊を近づける

屏風入りて今年ことしも今日が終り

朝の雪子の聲のこだまがする

手術すんで夜を待つ人々ばかり

夜に入るや菊を近づけなどし

海をめぐつて入る冬日今日も翌あすも

晴れつづき落ちるに疲れた冬日だ

那須温泉に遊ぶ

湯村の陽は黄色ぼいな足をのさう

祝終へて火燵に火を入れる

笹の雫聞けば太陽浮み出づる

飯能吟六句

山の雲今日しも行く老いにけらし

松風吹く蟲打てば蟲は去る

松風地に收まり犬のねむり

夕立すぎし静かさ蟻が落ちる

竹の雫落ちつきて夕迫りぬ

風落つやみどりの葉こぞりて立つ

苔の青さ子を待つてぼんやりして

土乾き来てたんぽゝの色の濃さ

濃き影持ちて柳のみどりいよゝ深し

悲しさはみどりにあきしわが小草の花

董ぬく日草といふ草のかゞやき

串田順を送る一句

旅を祈りわが手に拾ふ貝かな

風邪に寐て覺むれば芒ゆれをり

語りあきて語り次ぐ陽の枯草

—昭和六年—

寺の湯吟行七句

砂利を敷く冬空があがつて来た

晝過ぎて師走の門かどの地ならし

松は冬をおほひ湯場となれり

寺の跡今も残り冬は温ぬ泉あり

温ぬ泉がわいて松に風も立たない

温ぬ泉にこもる昔の松葉黄ばみし

冬にうとくし浴み来ては語る

網島温泉にて三句

冬日を追うて寐る病人の湯づかれ

金屏は冬の入日を受くるまゝなり

冬の落日わが前に蠅の來る

多摩川吟行

みどり深く冷たきまゝねむりを誘ふ

小鮎甘うもみぢの葉先そまり

もみぢを寐て見て淋しい顔がほしい

白秋と久振りで會飲

サロ^ンさんざし眞^ま紅^かな夜の太陽

市川忠男の水仙の詩に寄す 六句

しゆくしゆく^と夜のうつろな水仙

灯に近き^{ふたり}人の顔水仙の歌

夜となりて静まりぬ水仙の根もあらは

わがために闇は迫りぬ闇の水仙

冬の風鈴ふた二人となり鳴りそめぬ

砂壁に冬の陽が裸でをどる

小具義雄のハルピン行を送る
床に起きて槌音を聞く別れんとは

はつさき
八崎の大師六句

島の子もかき消えぬ佛の御手に

御佛の土をふむ子供のはだし

沼越えて草わけたまふ草の茂り

おのづから陽も落ちて島の灯ともし

島にゐて老いにけらし日の御光

茂つて茂つて佛の子だはだしだ

吹上の白花老兄を訪ふ九句

庭草枯らし切つて裸でゐる

かな・おはぐるとんぼ流は草いきれ

君は起つてやみをのぞく酒の冷さ

地のしめり露草を見るによろしも

豆の葉鳴り足もとに起つて夜ぞ

豆畑に入り黍の戦ぎこぞり起る

豆が戦いでそこらの草鳴り

水浴びてはだか折る唐もろこし

流持ちて耕す大きな木こ下したやみ

夕日夕日みんな女の子の濠端

二松俳句會吟四句

街ひろがり人々に秋が来た

萩も芒も枯れ電車のひびき

西に寄つて祭る一つの灯ともれり

百花園吟行九句

子供に雨が降つて草のかくれんぼ

笹葉擴がつて川より雨が來る

四五人残り見るものに茶の花あり

芒そよぐ笹の枯れた窓で

蓮枯れつくし地のとゞろき

草・枯草を説かれてあるき

北に住みてなほも揺るゝ木ありけり

川から煤煙がのぼつて冬の公園

霧も来ない枯れやうだ草の實

—昭和七年—

二月の芒十一句
父も子も皺だらけになつた枯芒

學校が廣くて芒を枯らし切つて

穴になつて淋しい枯芒

枯芒陽が土にしたしませる

廣いぼやけた太陽だ 枯芒

風邪が流行つて二月は芒刈り

枯芒陽がよく林をぬける

芒のゆれ強くて風を聞かうよ

枯芒夜の風音が遠い

枯芒笹がゆれて音もしない

家まはりの草を焼く工場の笛

草を刈つても冬からの草は青い

昭和八年四月廿五日印刷
昭和八年五月五日發行

定價貳圓五拾錢

版權所有



著者 萩原蘿月

發行者 東京市荒川區尾久町六丁目六一一
內田寬治

印刷所 東京市神田區錦町三丁目一七
白井赫太郎

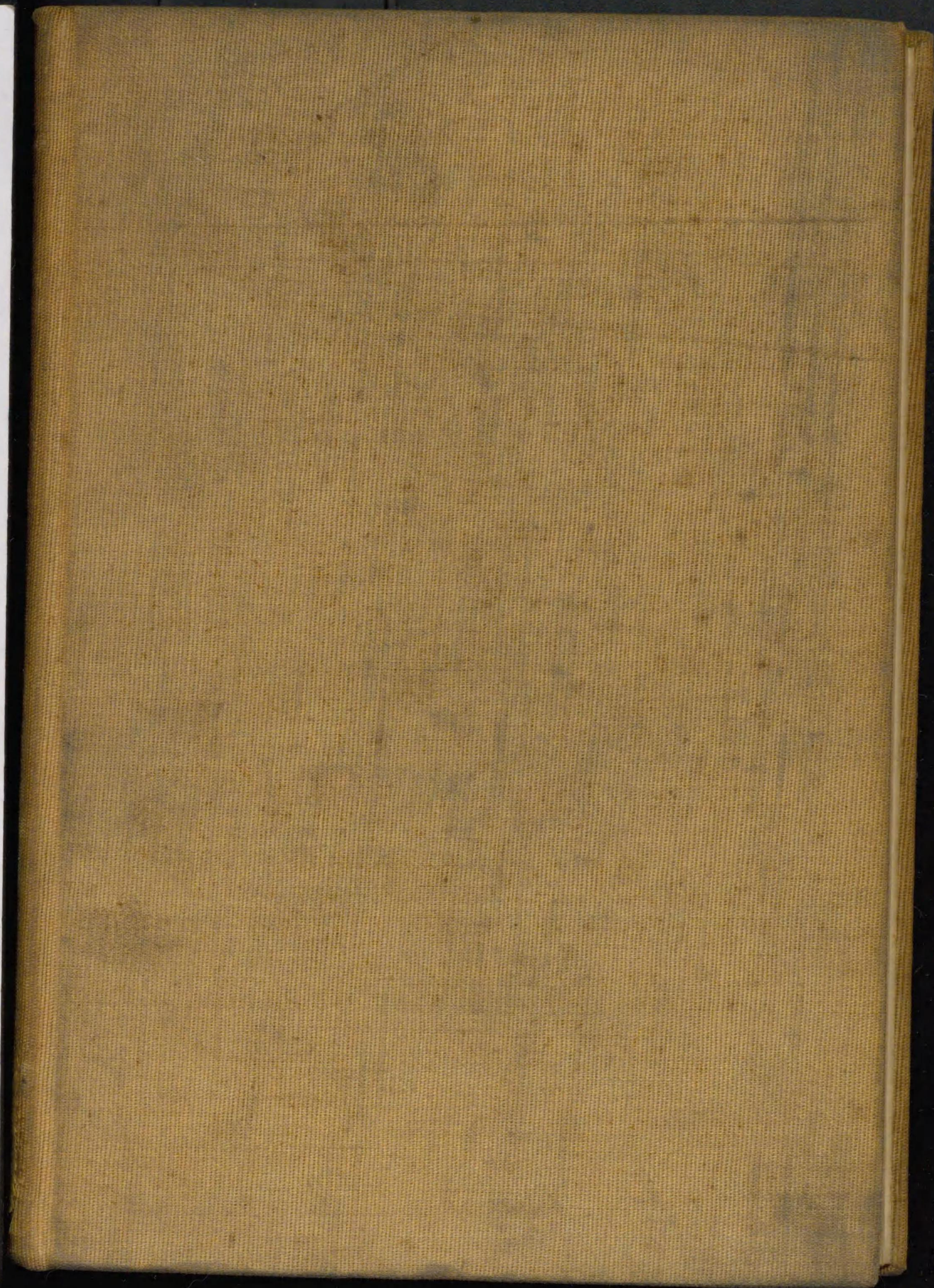
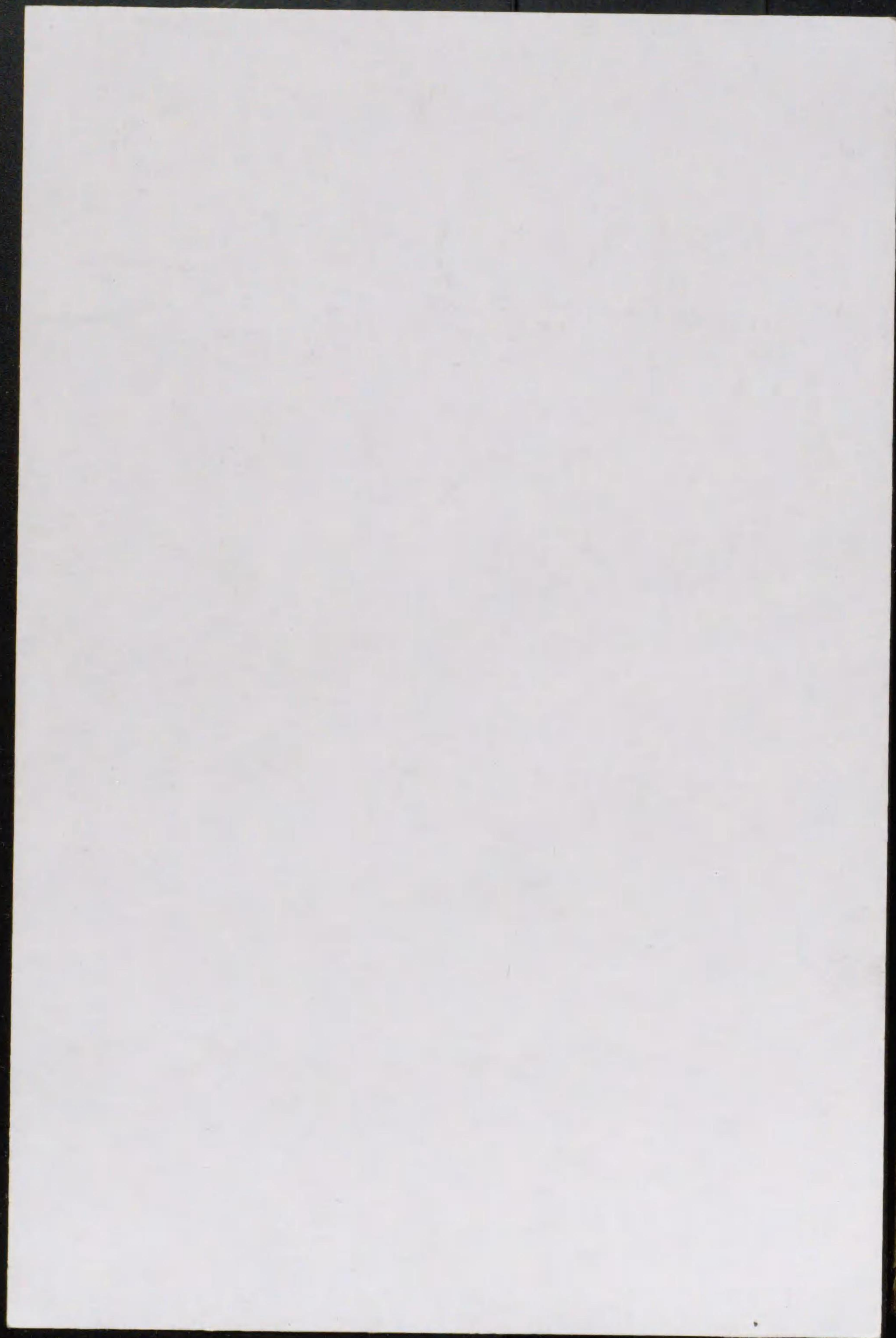
東京市荒川區尾久町六丁目六一一

發行所 唐檜葉吟社

精興社印刷

62
23

633
239

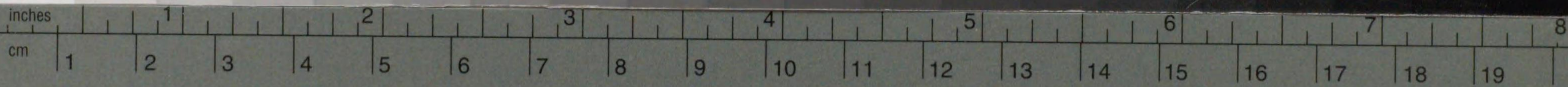


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

